

# 民主主義を拒む日本文化

Japanese culture that refuse democracy

Sadao Uegusa

Institute of Technology Environments

Sanada4-12-7 Hiratsuka Kanagawa

上草 貞雄

技術環境研究所

神奈川県平塚市真田 4-12-7

## 要旨

日本は明治時代に入り封建主義から西洋型民主主義社会への改革を果たし、すでに1世紀半を過ぎている。しかし、歴代の政治状況の経過をみる限り、民主的と思えない状況を諸所に見せるなど、社会的不安定性を露呈している。

そのため、他国との外交関係において協調しているかのように見えるものの、協調し難い印象があり、かつ、国内的にも社会的整合性のとれない文化・文明を創りあげている面がある。その原因は、国民と国家がそれぞれ異なる文化の面で自律性に乏しい思考慣習を内在し続けているからである。その改善として、日本の文化的自律性の回復のためアクティブ・ラーニングの採用による教育改革を必要とする、と考えた。

## Abstract

In the Meiji era, Japan reformed from feudalism to a Western-style democratic society, and it has already passed a century and a half.

However, even if we look at the progress of successive political situations, we often see situations that do not seem democratic, revealing social instability.

Therefore, although it seems that they are cooperating in diplomatic relations with other countries, they have the impression that they are difficult to cooperate, and they are creating a culture and civilization that is not socially consistent domestically.

The reason is that the people and the nation continue to have less autonomous thinking practices

in their different cultures. In this paper, we thought that drastic educational reform was needed to restore cultural autonomy.

## 1. 日本人と日本文化の遠因

人類の起源が、生物学的に言うところの、いわゆるサル類（特にゴリラ）からの分化に依存することはこれまでの進化論が示すところである。

ただし、地球の誕生は46億年前と推定されているが、最初の生命は現在から38億年前、さらに最初の哺乳類の生じたのが約6600年前に過ぎない。地球の誕生から見れば、人類の誕生はつい最近のことになる。

そして、その人類は祖型霊長類としてのサル類の約6000万年前以来の進化の途上で類人猿として、テナガザル、オランウータン、ゴリラと分化し、ヒト（人類）は約500万年前に南アフリカでアウストラロピテクスとして誕生したとされる。さらにその後、チンパンジーやボノボが遅れて発生している。

人類の祖形の発生はおよそ30万年前であり、さらに現在の直立歩行し言語を操るホモサピエンスの誕生は3～5万年前と考えられている。

ヒトは二足歩行をし、手足を自由に使うことにより狩猟能力を増大させたと考えられている。それは後に生物界の覇者となる能力であった。これは動物学者であったコンラート・ローレンツによる説である。(1)

ただし、このローレンツが唱えた人間が有する攻撃性に関する説に関し、マーチン・デイリーとマーゴ・ウエルソンは1988年、人間の攻撃性は10才後半から20才台前半の男性に生じやすいとした。(2)

そして、フランス・ド・ヴァールは2001年、ローレンツの言う人間の攻撃性は同時にその生存条件としての協力や和解行動に繋がると言明した。(3)

長年アフリカでゴリラを観察し研究をしてきた山極氏によれば、人間誕生に最も近いゴリラ社会は、ほぼ完全な植物食で、森に生る果物やタケノコを食べ平和な家族生活をしていると言う。さらに、他の動物を支配することもなく、仲間同士での争いもない。紛争の気配が生じるとどちらかが胸を叩いてドラミングをするが、それは和解の提案であると言う。

最悪として、仮に争うような状況が生ずれば子供ゴリラが間に入ることにより自然に解消すると言う。言うなれば弱者優先の社会である。(4)

なお、この人類がゴリラから遺伝的分岐をしたとする説に対し、米・テキサス州ベラー医科大学のヒトゲノム解析センターのR・ギブス氏による2012年発表の研究結果では、DNAレベルではゴリラ・チンパンジー間より、ヒト・ゴリラ間の相似性が高いとの結果を2012年に提出している。また、ヒトの精子には他の雄と競わせるDNAが存在するが、ゴリラには見つかっていない。その原因は、ゴリラはオス1頭に複数のメスが群れて暮らしており、競う必要がないからと解釈している。すなわちそれは、ゴリラ社会が比較的平穏な社会を創っている観察結果と一致するのである。

一方で、同じ類人猿種やサル類では、エサを巡っての争いは常に生じうる、と言う。そのような状況から、ヒト社会はゴリラ社会とその他サル社会との中間的位置を占めていると

考えることが出来よう。すなわち、同一社会内あるいは対他社会との関係は常に危うい状況を創り出す可能性があると言うことである。

そのような人類社会が編み出したのが法の下で協定を結び、安定化を計るということである。しかし、我々が眼にする現実社会ではそのような理性が常に危うい状況を創っている実態がある。そして、少なくともそのような実態はゴリラ社会と比較して不安定であるということでもある。

そして、新石器時代に入り主に4つの高度な文明が生じた。すなわち、

- ①：メソポタミア文明・前 6000～4300 年に渡り、現イラクのチグリス、ユーフラテス川に囲まれた肥沃な扇状地に栄えた。ただし、地理的に民族移動の交差点にあたり終始異民族の侵入を被り支配民族が代わった
- ②：エジプト文明・前 3000～30 年にナイル川とそのデルタに長期に栄えた。地理的に孤立した立地であったため比較的安定し、測量術、幾何学、天文学が発達した。
- ③、インダス文明：インド・パキスタン・アフガニスタンに流れる 3Km 余に渡ってアラビア海に注ぎ込むインダス川流域に紀元前 2600～1800 年に栄えた。
- ④、中国文明：これは、黄河文明（前 7000 年～前 1600 年）、遼河文明（前 6200 年～）、長江文明（前 1400 年～前 1000 年）の 3 つの文明を含む大規模文明と言ってよい。

この他に、メソアメリカ文明（前 2000 年～後 16 世紀）がメキシコに、アンデス文明（前 1000 年～後 16 世紀）がペルー・ボリビアに生じていたことが明らかになっている。

これら 6 つの文明を繋ぐと、少なくとも紀元前に地球を周回する文明の環が生じており、それぞれの文明が成立するため権力的システムを採っていたと考えられている。

すなわち文明とは、社会形成が物質的な循環で成り立つ限り、その社会の構成員が権力的構成を形作っている必要がある。そのため、その社会を構成している人々が何らかの役割分担をしており、その間に緊張関係を伴いながら（自らの役割を自覚しつつ、己を律する）自律が要求される存在であったと想像される。それは、現代文明社会に住む者達と同じ状況である。しかし、日本人が築いてきた文化は自律の面でそれらと異質であることを示すのが、本論での論旨である。

## 2、日本人の来歴とその行方

日本社会の在り方は近隣諸国とも異なる独特な経緯から生じ異質なのでないか、と言う説がある。そして日本人自らそう考える者がいる。それを追跡した 2 例を以下に示す。

### 2.1 対外比較による日本社会の成立の特徴

前述のごとく、世界で最も早期に文明化したのは中国においてであったと考えられている。すなわち、アジア諸国はむろん、旧くから大陸を連ねる諸国から異民族の流入が繰り返され、各地方での同化が繰り返されたであろうことは容易に想像できることである。その結果、中

国各地に都市が生じ、その最初の中心が黄河文明として栄えた。そして、その最終勝者が皇帝の地位に就く。中国最初の王朝は夏王朝で紀元前 2070 年とされ、これにより中国は事実上の統一を果たし、夏王朝は 17 人の王により 500 年間継続したとされる。紀元後 1912 年の清王朝の終焉まで王朝制が繰り返されてきた。そして、1949 年以降共産主義体制に入り、現在の経済成長を創りあげてきたことになる。

そのような中国の歴史が、首長が存在する王朝の下に国家が長期に安定的状況を創りあげてきたのに対し、日本が国家として統一を果たしたのは 1603 年の江戸幕府の成立を待たねばならなかった。これを日本の文明化の始まりとすれば、中国に遅れること 3600 年を費やしたことになる。

このことが、同じアジアの国であっても、日本の国情が狩猟・採集時代が長期に渡って継続していた事情がある。すなわち、中国で武帝が皇帝となり王朝が栄えていた頃、日本は縄文時代の末期にあり、人々は竪穴住居に住んでいた。発掘資料によれば、1 棟 4～5 人でほぼ 4～6 棟で一村を形成し、狩猟・採集生活をしていた。この時点でも中国自体あるいはそれを經由しアジア各地から日本に移民が流れ込んでいたことになる。移民は最初在来の日本人と距離を置いて居住したであろうが、その後徐々に同化していったであろうことは、容易に予想されるが、後述のように、それは遅々としてものであったであろう。

すなわち、出身地が遠く離れ、言語や文化が異なる者同士の場合は、身振り手振りで意思伝達を行ったであろうし、社会的な同化の面では遅々としたものであったと想像される。

歴史的にそのような事態が日常茶飯事に生じていたとすれば、そのように縄文時代の遺跡から文明的な発展も遅々として進まないであろうことは、容易に考えられる。

そのように日本に流入する異国人に対し、在来日本人が文化の違いから意思疎通が困難で相互の意思が十分通じ合えなかったにしても、自ら理解したかのように譲歩する場面がしばしばあったと考えられる。そのような民族混交時代であっても相互に言語的理解が乏しい状況が続く中であって、後述する現代日本文化の基底を形作られたと考えられる。

## 2.2 人類遺伝学による日本人

ヒトの外見的相似性から自他の遺伝的親近性を観るのが人類遺伝学である。遺伝的複雑性が日本文化の形成に影響していると考えられる。まず、日本人の多くは出生時にお尻に蒙古斑を示すことから、その先祖が蒙古周辺から日本に到達したと考えられてきた。

その証左として、人類遺伝学の松本秀雄氏がモンゴルに近いバイカル湖東部の地プリアートを視察した際、そこに日本人と見まがう多くの原住民を発見するにつけ、日本人の原型を見る思いをしたと述懐している。(5)

確かに、松本氏がプリアートで撮った女性たちの写真を見る限り、それは日本のどこにも見かけることができる人物かに思われ、松本氏の説を鵜呑みにしなければならないと思うほどである。

しかし残念ながら、次項で示す DNA の Y 染色体を比較する限りでは、両者の相似性はむしろ

ろ、他の民族より小さかったのである。

### 2.3 DNA 解析によるアジアにおける日本人の位置

1941 年の第 2 次大戦開始にあたり、日本の指導者は戦意的結束のため「単一民族日本」を標語に掲げたが、後述の研究では「単一」どころか、アジア地域では地上で最も多様な染色体を有している一群に入り、最も混血が進んでいるアジア民族とさえ言えるのである。

人間の遺伝子（ヒトゲノム）解析が開始された 1985 年以降は、その方面の研究精度が各段に高まり、それは民族的な移動や分布の詳細を分析するには DNA の Y 染色体を調査する必要があった。(6)

父系で遺伝する Y 染色体の種類は、地球上で 23 種類存在し、アジア諸国には大分類で n、C、D、N、O、Q、R の 7 種類、さらにそれらの細目を含めて 15 種類の存在が確認されている。この細目分類の各細目数を Y 染色体のパプログループと称し、その数値が父系でかつ共通遺伝子を有して分岐した集団数を示している。

C グループには C1a1 と C2 の 2 種の染色体が存在するが、前者 C1a1 が日本固有にみられる Y 染色体と考えられている。

ただし、日本を含む各国民族が、程度の差こそあれ歴史的に混血を繰り返してきているので、通常一国を形成している各民族でも多くの場合、複数の染色体を保有している。

かつ、複数の Y 染色体個々のパプログループの割合は異なっており、その様相は複雑である。ただし、その割合の分布から歴史的な混血経緯を割り出すことができる、とされる。

例えば、台湾原住民は O1a1=89.6 と n=48 が、チベットでは n=105 と D1a1=46.6 が突出して大きな値を示し、その他は含まれていても極端に小さな値に過ぎない。前者は島国由来、後者は山間部居住由来であり、比較的閉鎖的な生活環境にあったことがその原因と考えられている。

それに対し、日本の場合は、n=263 と突出して大きく、D1a2a=38.8、o47z=25.1、o2=16.7 が比較的値が大きいものの、調査対象の Y 染色体 15 種のうち 12 種もの多様な染色体が万遍なく含まれている。また、日本人における C 型染色体の 5%程は、ごく古い時代のヨーロッパ由来と考えられている。そしてそれは、同じ島国で近隣関係にある台湾人のゲノム状態とも大きくかけ離れているのが注目される。

これより、日本人が単一固有な民族と言うことは出来ず、それは戦前の戦争指導者による宣伝文句でしかなかったことになる。

また、O 型は満州・朝鮮民族並びに日本人が同程度に有し、1 万年ほど前から中国本土で増加し、拡散した結果と観られている。このうち D1a2a 型が 38.8 と特に日本で多いが、同型染色体は北満チベット民族「オチョロン族」が 47 と特異的に大きな値を示している。

この民族は総人口 4 千人ほどで原始的狩猟生活をしており、かなり閉鎖的な生活環境にあるとみられ、このタイプは他の東アジアではほとんど見られない。

なお、前述で日本人とプリアート人との外形的親近性が指摘されたが、遺伝学的に相似性

がないという結果を示したことは、意外なことであった。

#### 2.4 DNA 分析による日本民族の変化

近年 DNA 分析による縄文以来の日本人の形成に関する研究が進んできている。国立科学博物館の神沢氏らの解析からは、主に西方のアジア大陸から日本に流れ着く人々がいたことはあったが、縄文人が集団で日本列島に定着し始めたのは3万8千年～1万8千年前であるとされた。そして、現日本人として縄文様式の生活を安定に定着させたのは約 BC7500 の縄文早期から BC2000 年までの縄文中期までと考えられている。この間日本の人口は約2万から26万人まで急激な増加をみせていた。しかし、その後縄文晩期の BC350 年までは人口は8万人と約 1/3 まで急減している。その理由としてこの間に大陸からの人口流入に伴う疫病が蔓延し、日本において人口急減を招いたとみられている。

ただし、この人口減の期間に縄文・弥生（この弥生人はアジアとその周辺の広域から来たと考える）の複雑な文化的変遷が生じ、それと同時に言語的通話が困難ゆえ異種間の文化的軋轢と融和を繰り返したと考えられる。また、異種文化間の言語理解の困難性から、そこでは以心伝心・忖度などの非言語的交わりをする必要があった。その結果、他人の眼を気にする、などの文化的特徴を生じたであろうし、このことが、今日に至る日本の文化的自律性を脆弱にしたことが考えられる。この点が、本論における重要なポイントになる。

ここで、東京都内の人を中心にゲノム解析をした結果その 10%が縄文人の遺伝子を受け継いでおり、北海道のアイヌの人々は8割、沖縄の人々で3割との結果が示されている。

同研究員らは、縄文人の全ゲノム（遺伝情報）を解析し、縄文人が大陸の集団から分かれた時期が今から約2万～4万年前とみられると発表している。日本人の祖先がどこから来たのかといった謎に迫る貴重なデータとなる。(7)

また、国立遺伝学研究所や東京大学などが共同で、礼文島（北海道）の遺跡で発掘された縄文人女性の人骨の歯から DNA を取り出し、最先端の解析装置を使い、現代人のゲノム解析と同じ精度で DNA 上の配列を特定した。また、この配列を東アジアで現在暮らす人々の配列と比較した結果、縄文人の祖先となる集団が東アジアの大陸に残った集団から分かれた時期が約3万8000年前から1万8000年前の間であることが明らかになった。

そしてまた、縄文人は日本列島に約1万6000年前から3000年前まで暮らしていたと考えられている。3000年前以降は大陸各地から新たに弥生人として渡来し、日本列島に住む人々の多くで縄文人と弥生人以降のゲノムが交わったことがこれまで知られていた。今回の解析では、国内の地域ごとに縄文人から現代人に受け継がれたゲノムの割合が大きく異なることも明らかになった。

#### 2.5 日本の文明化の流れ

日本社会の文明化の始まりは4世紀頃の古墳時代にあり、主に中国からの伝来によるものであったと言う説が一般的である。それは中国を始めとする東アジアで醸成された各種

文明器具・遺物などに現れている。例えば、古墳の埋葬施設が竪穴式から横穴式に代わり、牛馬の農耕使用、金属加工や製陶法など、そして、それに伴う学問や芸術・思想・宗教の受容などが挙げられるなど、生活様式の諸変化に現れている。

しかし、決定的と言える日本の文明化はヤマト王権の誕生による。それはその当時、奈良地方に造られるようになった前縁後円墳の普及にみられ、それに伴い日本文化が狩猟採集文化から権力的構造的文化へと明らかな転換を示している。

ただし、この文明化の事態は決して日本が自ら望んで変化したのではなく、外部からの文明的圧力による受動的結果と考えられていることは重要な視点であろう。

そして、文化的変化として712年には古事記、720年には日本書紀が著わされ、そこに日本の由来が記されている。ただし、前者は和文でヤマト民族向けに、後者は漢文で異国（中国）向けに書かれたと言う違いがあり、言語使用のてんで分化が生じている。また、629～759年に書かれた万葉集は、和歌そのものは漢字表記であるが、その他は万葉仮名が用いられており、文字使用の面で移入文字である漢字と和文字の両者が並立しており、その後、今日の和文に移行するところの日本文化の建設へと重心が移るのである。

すなわち以上の事実は、文字使用の点で弥生人が移住し始め漢字使用から和文字使用まで、最長で3700年余を要したことを示している。ただし、話し言葉として縄文人と流入した弥生人が意思疎通を始めた時期を特定することは現在のところでは困難な状態にある。

前記のように、流入した弥生人の割合が縄文人を上回ったとしても、当時の日本における人口密度は小さく、それぞれの出自が異なる部落が互いに遠く離れて暮らしていたと仮定すれば、ヤマト言葉の成立は紀元後であった可能性がある。ただし、ヤマト言葉が一般に使用されるようになったのは室町時代末期であるとされ、14世紀後半とされる説がある。(8)

また、日本がさらに中央集権的な律令国家を造るためにはもう一段の外圧を要した。それは、七世紀後半の663年、唐の援助を受けていた倭国（日本）は新羅に敗れた百済を救う目的で韓国忠清道錦江河口の白村口で、唐・新羅の連合軍との間での戦いに惨敗し、百済は滅亡する。しかし、この敗戦を機に倭国は目が覚めたごとくに自国の中央集権的律令国家の完成へと文明国家形成にまい進することになったのである。

ただし、最大7千年の文明の歴史を有するメソポタミア文明の起源と比較するなら、日本の文明化の歴史は、期間にしてその最後の17分の1程に過ぎないし、和語としての共通語の使用も遅かった。その点から、国家としての文明化の歴史はその外見と比して未だ脆弱であるとする、のが本稿での考えである。

## 2.6 日本の文明化の現状

今や日本は先進国の一員と自認するに至っている。しかし、その現状は先述の動物学者で1973年のノーベル賞受賞者C・ローレンツが文明批判として指摘したように、①人間同士の（過当）競争、②核兵器の開発、③人口の過剰化、④生活空間の荒廃、⑤感性の衰退、⑥伝統の破壊と教化のされやすさ、⑦遺伝的な頹廃、を予想している。(9)

現在、世界各国が文明化に向かって突き進んでいることを善としている限り、皮肉にもその営為は同時に、それによる上記各種問題発生 of 諸要因が人類の衰退を予想していることになり、ローレンツによる指摘は各国の文明化営為に対する警告となっている。

その結果、現在文明大国を自認している日本も 4 大文明と比較すれば、極めて短期間で高度な社会的文明化を遂げたことになるが、それを自賛して良いか否かの疑問が生じる。しかし、その功罪に関する議論に接する機会は極めて少ないのが現状である。

## 2.7 日本文化に対する現状認識

これに関して筆者による事例研究は、すでに述べてきたところである。(10)

そこでは、日本人に生じうる言動の不可解さや不自然さについて分析をしたことになるが、十分な理解に至っているとは言えない。本報の目的は更にそれに迫ることにもある。

再び、現在の日本列島に最初に人類が到達したのは、今からおよそ 3 万 8000 年前の旧石器時代のことである。その後、沿海州・サハリン・北海道という北ルートや、中国大陸・朝鮮半島・北部九州という西ルート、南西諸島を島伝いに移動する南ルートなどを通じて、繰り返し西域からの渡来があったと考えられている。

縄文人は基本的に旧石器時代に日本列島域に渡来してきた人々の子孫であるが、前述のように現代人のゲノム情報から人口の約 12% は縄文人に由来することが判明されており、形質人類学的な研究では、それが現代日本人の直接的な祖先の一つと考えられている。

さらに、縄文後期日本の平均人口密度は東北以北を除き 100K m<sup>2</sup> 当たり 10 人以下と少ないこともあり、縄文文化の特徴は、4 大文明の場合と異なり農耕・牧畜が行われず、季節的に循環する動植物の狩猟採集など、自然に生育するものを手分けして収集していたとみられる。したがってそれは、自然に対して受動的な生活態度であった、とすることが出来るし、かつ、人々は互いの協力なくして生活することは困難であったであろう。

それが次代の弥生時代後期 (B. C5~3 世紀) には、同人口密度が 100~300 人に増加すると共に、中国江南地方から稲作栽培法が伝わり、生活様式が人工化へと変化し、隣接環濠集落どうしの争いが発生するようになる。それは、環濠遺跡から鉄器や人骨が出土する場合があることに現れている。

もともと、そのような争いが生じることの防止のため、水田を環濠式にしたと考えられるが、効果は限定的であったと考えられる。何れにしても、日本社会が文明化して争いを生じた矛盾は、前節で言及した C・ローレンスの警告がはやくもそこに現れていたことになる。

## 3. 日本人の自律性

日本人は集団主義であるとか、または本音と建前を使い分けるとよく言われるが、それは本当か否かを探ることにより、日本人の精神的自律状態を分析する。



### 3.1 日本人の集団主義性

集団主義の類似概念に同調行動や協力行動があるが、ここではそれらを分離し難いことから同義として扱う。

一般概念として日本は集団主義的で、それに反しアメリカは個人主義的と考えられている傾向がある。しかし、22 件の心理学的研究結果では両国に明確な差が見られない、と言う結果を示した。むしろ、上記通念どうりの結果は 1 件のみで、その反対は 5 件もあったのである。

その原因は、日米開戦にあたりアメリカ側の日本に対する宣伝活動の影響が、その後の文化ステレオタイプとして生き続けているから、と考えられている。(11)

### 3.2 忖度文化

忖度という言葉は、中国で西暦 210 年に曹操により書かれた「述志令」に見られるのが最初とされるが、それ以前に当時の中華圏では「人の考えを推し量り自分が不利益を被らないようにする保身的行為」という意味で社会的慣習として深く根付いていたとされる。

しかし、経済発展を重視する現代中国においてはその文化は消滅したと言える。しかし忖度文化が弥生時代に日本に持ち込まれ、自分より上位の者の心情・立場などを考慮しその者に良いように振る舞うといったことが慣例・文化として定着したと考えられる。

日本人は、場合により相手に対し「建前」と「本音」をうまく使い分けると言われるが、それにより円滑なコミュニケーションを図ろうとする意図があり、それは「和」を保つテクニックとして社会的慣習化されている。

すなわち、公的な場であったり、両者の関係が比較的遠い場合は「建前」を優先させると、それは比較的形式的な会話となる。一方、比較的近い間柄では「本音」で会話すると言うようにである。すなわちそれは予め、対話する相手との心理的距離を感知し使い分け相互の意思疎通をスムーズにするのである。

また、忖度は、その相手が遠くにいたり、近くにあっても相手の身分が自分より上と考えた場合は、相手の意図を推し量るように発話されることがある。一方、自分より下とみた場合は無視する場合も生じる。

このような状況は日本以外の国々でも生じうるが、特に日本では、文化的に定着している。しかも、この「忖度」の弊害が国運を左右する事態があった。

その一例として、日本の第 2 次大戦開始のきっかけとなった 1939 年、モンゴル国境付近で日ソ間に生じたノモンハン事件である。それは、日本の前線部隊が軍司令部の意図が通信の不備も重なって忖度して行動した結果、戦闘の大規模化を招き、第 2 次大戦の勃発とその敗戦に繋がったと考えられている。

すなわち、欧米諸国では発話や文字を媒介することにより、互いが自己確認しつつ意思の交換を重視する文化と異なり、ましてや、戦争における作戦では前線と司令部との緊密な連絡の必要なことは明白であり。それを怠ったことが戦争拡大への起因となった。日本の現代

社会においても、それを起因とする社会機能の各ステージでトラブルを生じる原因となっている。

### 3.3 日本における忖度文化を創った素因

中国文明の起源を紀元前 7000 年としても、それ以前から日本に流入した人々がいたと考えれば、日本の長期な未文明時代において、言語的交流が困難な条件下では互いに相手の意図を探ろうとする心理は広範に定着していたと考えられる。その結果、基本的にそのような状況の発生が相互に忖度し合う慣習を創りあげたと考えられる。

すなわち 2.1 節で示したように、日本における忖度文化発生の原因が、日本の歴史の大部分がアジアを中心とする各国・各地からの先進文明の流入にあったと考えられる。すなわち前述のように、DNA 分析により現在の日本人のほぼ 12% が、縄文人の遺伝子を受け継ぐ日本原生の人々とされるように、単純に考えてその他大多数はもともと日本以外の諸外の人々が各言語を有しながら流入した先祖を持つ。それら個々の日本への流入過程は様々であったと考えれば、それぞれの人たちの文化が異なるゆえの会話・意思疎通が困難を伴ったであろうし、そこには始め、言語不通ながらも意思の伝達をする必要があった。それが身振り・手振りや暗黙裡に以心伝心する術の延長として「忖度」の術を身に着けたと考えられる。

その結果、そのような忖度文化の慣習が他律的な文化として日本に表出したのである。

## 4. 日本文化における自律社会創造の困難性

### 4.1 民主主義を欠いた日本文化

迂遠であるが、社会の自律性と民主主義概念が相当の程度に関連している事象であるとの背景から、始めにヨーロッパにおける民主主義がいかに成立したかを振り返っておく必要がある。

それは、古代ギリシャ時代の BC492~449 年の 43 年間に、3 度に渡るペルシャ軍の侵攻に対しギリシャ市民は、自律的な協力体制を創りペルシャ軍を撃破した歴史を有している。

時を同じくして、ソクラテス、プラトン（哲人政治）、アリストテレス（6 政体論）を産み、「等しい者を等しく扱う」ことが正義の本質であるとし、市民間の平等に立った政治（民政）による相互支配を重視する直接民主制が、現代の民主主義思想に繋がっている。

その後、これを基底とする民主主義思想とそれによる政治体制がヨーロッパを中心に敷衍されてゆくことになる。

ことさら、明白と言えるそのような歴史的事実をここに持ち出した理由は、日本における民主主義思想が現代に至るも、憲法上の文言に止まり、その実態のない借り物と化していることを再確認する必要があるからである。

すなわち、1945 年に日本は太平洋戦争に敗れ、占領下の日本政治を仕切った米軍司令部が書き上げた日本国憲法が、日本国民に民主主義に基づく立法と行政の枠組みから成る主権在民を唱う自由民主主義の実現を目指したものであった。しかし、それらの形式と実態は、

その後の日本社会においては、その本質から乖離したままで実行されている実態がある。なぜなら、その後の日本文化そのものに民主主義が未だ定着していないからである。

すなわち、そのような状況が、日本が表向きな民主主義のもとで民主主義国家を運営していると言う空疎な実態が継続されているからである。なぜなら、民主主義で思い浮かべるのが「多数決原理」であったとしても、それ以前に最重要な基底概念として「相互に助け合うため自律の精神」の存在を必要とするからである。

日本社会と、特に教育現場で欠けている精神がそこにあり、それが少なからず日本社会の文化としての付度精神とその実行が、民主的な対人関係を形成するはずのコミュニケーション能力を阻害している可能性があるからである。

したがって、そのことが日本において民主主義社会を形成する基底概念としての「自律の精神」を養成する機会を失わせている可能性がある。

#### 4.2 教育の中で涵養される自律性

日本国内では現在も、前節に示した付度文化の存在を美德とする傾向がある。しかしそれに反し、近代以降の世界各国が民主主義国家を目指す潮流と逆行する各種要因を有していることは明らかであり、日本が民主主義世界の一員であろうとする限り、付度文化の慣習を社会的に持ち続けることは民主的世界の一員としての誹りを免れることは難しい。

そのための方策は多方面に考えられるであろうが、最も効果のある積極的な方法は特に「基礎教育」の実践方法を検証することにある。

なぜなら、戦後教育を受けた筆者の体験からは民主教育を受けたと言う具体的実感が無いからである。その点は現在の日本の子供たちも大きな相違はないと考えられる。なぜなら、民主教育とは言葉の概念に止まらず、第一に自律教育でなければならないからである。

それゆえ、日本で行われている教育は旧態依然として、平等主義的教育の延長としての受身教育に止まっているからである。より現実的には子供たちにとり将来その時期がくるであろう上位の学校に合格するのが当面の目的になる。しかし後述のように、後進国と目される東南アジアの小国の多くの国々がその経済成長のために基礎教育における自律教育を続々と実行している傾向がある。

教育方法の中身に差があるが、世界各国のなかでも最も先進的な自律教育を実行しているとみられるのは北欧フィンランドなど北欧社会であると言われる。

フィンランドにおいても日本式の黒板に向かう一斉式授業が全くないわけではないが、その大部分がグループ授業に重きを置いて行っている。すなわち、小学校のークラスの多くが20～25人ほどの中で、男女2人ずつ計4人で1グループを形成し、それを1教室5、6グループほどを創る。各曜日ごとに1日に行う教科はほぼ決まっているが、朝グループが教室に集合すると、その日に学習する教科の順番をグループ内で自主的に相談して決め、実行する。個別に判らないところが生じるとグループ内で議論したり相談し合うが、それでも解決しない場合は担当の先生に相談する。日本と異なり、学習において先生がすべてを先行して

主導することがない。グループ内で回答がでない問題の場合は、最終的に先生に相談するが、その逆ではない。このような受業形態をアクティブ・ラーニングと称する。

そこでの先生の重要な仕事は教える事ではなく、生徒たちの学習が順調かどうかを見守り、グループ内で議論し合うことを勧めるが、議論しても解決に至らない場合は先生に意見を求める。この点で日本での教室の風景とは真逆な傾向を示す。教員になるには学部卒業後に修士号を有する必要がある、教員採用試験の競争率は毎年7倍程度と高く人気があるなど、厳しい関門の実態がある。それは教職が尊敬と信頼の対象となっている証拠である。この点でも日本の事情と差異がある。

日本における基礎教育（それ以降も同様であるが）の基本は黒板に向かう一斉授業に見られるように、生徒はすべての面で受動的な態度を採らされる。その結果多くの生徒は、なぜそれを学ばなければならないかに疑問を抱くことなく、漫然と各教科で与えられた課題に向かい、しかも、それを記憶することを強要させられる。これは、先のアクティブ・ラーニングに対しパッシブ・ラーニング（PA）と称することができる。（PA）は筆者の造語である。

それは論理プロセスの理解を重視するはずの算数・数学でも変わらない。その結果として、試験の成績を競わされるが、それは主として暗記力を試されていることに等しい。そして試験が終われば、それをご破算にして次に取り掛からねばならない。

そのプロセスは自律教育としては空虚である。それは、生徒にとりなぜ学ぶ必要があるかを自問する機会が与えられていないままの、言わば受動的態度を採ることを強制させられる。そのような近代的であるはずの日本の教育システムが、形式として教師との対面授業を始めた江戸時代の寺子屋式教育から一貫して繋がっていることに気づかされる。

世界各国でも教育方法の中身に差があるが、自律教育としてのアクティブ・ラーニングを実行しているとみられるのは北欧3国を始めとするフランス、ドイツなどのヨーロッパ諸国全般と、アメリカ、カナダなどの先進諸国が先駆けて実行され、周辺諸国に波及している。その他2000年以降は中国、韓国、台湾、香港、シンガポール、インドネシア、マレーシアなどのアジア諸国において急速に拡大普及している傾向がある。このような諸外国における教育の変革情勢の中で日本では、小・中学校を併設している教育大学での例の他、一般の小中学校における先生が、個人的意思で試みている例が29%あったことが明らかにされている。

すなわち、その実情は日本の文部科学省で率先して実行する意思がないことを表しているし、その必要を感じていないかのようなものである。

また、国連が世界156ヶ国を対象に行っている最近の世界幸福度ランキングで、フィンランドは常に1位にあるが、日本は56位であり、フィンランドは自律教育と幸福度が高位で一致しており、一方の日本での受動的な教育下では必ずしも一致していない結果を現わしている。加えて、2021年度の世界腐敗認識指数ランキングでもフィンランドは世界1位で、他の北欧諸国も上位にあり、その他世界の先進国と目される国々は上位にある。この点日本は、54位タイ国、55位ニカラグアに次ぎ、56位にあり、いわゆる、後進国群に近い位置に

ある。すなわち、そこに上記授業形態と幸福度ランキングの間に相関性があると考えられる。

以上の結果から自律的に生きる意味は、改めて、各自が生（生きること）に対して積極的態度をとることを意味し、かつ、そこに民主主義としての生の充足が得られることを含意していると考えられる。

OECD 加盟国での生徒の学習到達度調査（PISA）が3年に一度行われている結果では、読解力、数学、科学、問題解決能力の各部門の国際比較がされている。そこでは毎年フィンランドがどの部門でも1, 2位を占めている。日本もそれに次ぐ順位にある。この点で記憶力重視の教育の利点が表れてはいるが、必ずしも生徒による自発的行為による現れでないことは確かである。

フィンランドにおける学習到達度が優れている原因を当の国民に尋ねると、多くは「何も特別なことはしていない、そのために学んでいるわけでない」という返事がくる。それが当然な姿であると考えられるからである。(12)

それは、記憶力重視教育のパッシブ・ラーニングにより学習到達度の面で効果を挙げている日本の国状が、少なくとも民主主義世界における自律的な生活態度の涵養と、社会の文明的発展を目指すことで幸福感を醸し出す社会的傾向の中にあっては、それらが合致し得ない教育状況にある事に関し齟齬を生じていることになる。そして、日本はそのことに気づいていないかのように民主主義国の仲間入りをしており、それに齟齬を感じることもない。

#### 4.3 自律教育（アクティブ・ラーニング）の実態

アクティブ・ラーニングにより堅実な経済成長を成し遂げているのが、再びフィンランドなど北欧諸国であると言われている。

フィンランドにおいても日本式の黒板に向かう一斉授業が全くないわけではないが、その大部分がグループ授業に重きを置いていて、その形式も多様である。すなわち、小学校1・2年生では円座を組んで座る共同学習とペア学習を交互に行う場合が多く、小学3年生以上、中学、高校では男女が混合した4人で1グループの協同的学びを先生の助言を受けながらの授業形態を採る場合が多い。この授業形態は国際的にみて、誰かの指導で広まった現象ではなく、佐藤氏はこれを「教室における静かな革命」と称している。

この現象は21世紀に入り、先述した東アジアの後進国群において、一斉に、国家的政策として、トップダウン式に断行されたという特徴を示したが、その理由は、それらの国々では、当時開始されたグローバリゼーションによる国際的な経済成長に打ち勝つため、国家の存亡をかけた施策として行われたものであった。(12)

ここでは、経済成長の目的が先行し、民主的自律社会の成立が付随した形をしている。

一方、日本がその方向に向かわなかった理由は2つある。一つは、すでに戦後1950年以降20年以上続いた高度経済成長の成功体験がその必要性を排除し、社会の民主主義化を促進させる機会を失ったのが原因であり、同時に、現在世界の潮流になりつつある学校におけるアクティブ・ラーニングを必要とする機会を失っままにある、と考えられる。

ただし、2020年以降のコロナ禍に対する対応と2021年の日本でのオリンピック開催直前の各種社会的混乱は目に余る程であったが、それを「日本社会が民主主義的な成熟を果していないことに一因がある」と考えた日本国民が存在しなかったのである。

ここで、教育学の佐藤氏によれば、アクティブ・ラーニングを行う指標として以下の4つを挙げている。(12)

- (1)、知識基盤社会への対応
- (2)、多文化共生社会への対応
- (3)、格差リスク社会への対応
- (4)、成熟した市民社会への対応

(1)を除く、(2)～(4)は、民主主義社会成立への対応と言える事項であり、その上での知識の蓄積と体験的学習であり、それらの吸収が安定な民主主義社会の創造に繋がっていると考えられる。

ただし、日本におけるパッシブ・ラーニングにおいて、以上の4項目のいずれかをも目標にしているとは考えられない。その理由の一端を次項に示す。

#### 4.4 民主主義指数

英エコノミスト傘下のエコノミスト・インテリジェントユニットが、世界167ヶ国を対象に①選挙過程と多元性、②政府機能、③政治参加、④政治文化、⑤人権擁護の各項目を評価し、各10点満点で民主主義指数を発表している。そこでは世界の4.5%にあたる20ヶ国を①～⑤の平均スコア8.0以上とする「完全な民主主義国」のカテゴリーとしており、上位には軒並み北欧・欧州諸国が集中している。その最下位はポルトガルである。次に平均スコア7.0～7.99が「欠陥のある民主主義国」のカテゴリーとし、世界の43.2%である55ヶ国を挙げており、日本は24位にある。ちなみに、23位が韓国、25位が米国であった。韓国は政治参加が7.22、米国は政治機能が7.14とそれぞれが5項目中最低値を示している。

日本の場合はその影響が選挙の投票率にあり、衆院選では昭和の末まで平均70%程で推移していたが、平成に入り下落し、現在50%に近づいている。また、参院選では平成22年頃までほぼ60%であったが、それ以降50%以下を示している。上記日本の結果は、民主主義国としての欠陥を示しており、国民の自律と協調による行動の観点から民主主義の根幹が揺らいでいることに起因していることを示すものである。(13)

### 5. 自律分散協調社会の視点

#### 5.1 自律分散システム研究の略史

1977～81年、生物学や工学など広い分野に目を向けると、自律分散システムのコンセプトの形成がされてきた。最初の発想は生体(生物体)における各機関が連動して全体の機能を形成していることから、コンピュータシステム開発にその概念を応用しようとし、一部で

は成功したと言えよう。しかし現状においても、生体そのものの自律分散の究極的なシステムが解明されたと言えないが、社会構造のあらゆる面での自律分散システムの研究は続いている。(14)

日本におけるその方面の研究として、南方熊楠(1867~1941)がその晩年に世界に先駆け、粘菌を対象にした研究で先鞭をつけた。粘菌は「菌」の呼称がついているが、真正粘菌と細胞性粘菌の2種類がある。このうち、真正粘菌は多くの細胞が集合し、単細胞でありながら幅1 mものアメーバーになることがある。その特徴は、這いまわり、自由自在に膜を変形させながら、外部物質を取り込んで栄養にすることが出来ると共に、自らの各細胞が自由自在に膜を変形させて動き回ることが出来る。

人体の細胞にもアメーバー状の動きをする細胞があり、がん細胞や、そうした異物を排除しようとする白血球の免疫細胞がその代表である。人体や人間社会がそれら各部分が自律的に分散し、かつ協調していると観るなら、自律分散協調システムと捉えることが出来る。そして、これらの考えのうえに各学問分野で研究が続いているが、特に数学的に厳密な表現をしようとする試みでは一部成功しているものの、多くは困難を抱えているのが現状である。

人工的な自律分散システムの代表例として、インターネットシステムを挙げることが出来る。これは、ネットワークで接続された複数のコンピュータで作業を分担して行うシステムであり、複数の端末がネットワーク環境で相互に接続することで、処理を分散している。そのシステムに端末を接続することで膨大な情報を検索できるし、新たな情報を付加することが出来る。また、一部の端末が機能を失ってもネットワーク全体が動作不能になることもない。

しかし、無数に接続されている端末の機能の多くはシステムを受動的に利用することはあっても、何らか能動的な機能を発揮することは極めて少ない。その点で、自律分散的であるが、自律分散協調的システムとは言えない。自律分散協調的システムになりえる対象として、人間やそれ以外の生体機能や、それから成る社会システムを挙げることが出来る。

すなわち、前者では生体を構成する各細胞が、その中枢機能によりそれぞれの機能が自律的に分担され、かつ中央の監視機能で統御されて協調的に作動している。これに比較すれば、人間の社会的機能は絶えず劣化と再生を繰り返し、不安定な状況を醸し出している。

そのように、常に活性化を伴う社会を形成させる方法として、アクティブ・ラーニングは有効な結果を期待することが出来る。

## 5.2 日本文化の自律分散協調の状況

その点からこれまで本稿で考察してきた日本文化を振り返る限り、そこには自律と協調の点で社会的機能が不安定になる場合が多々生じていると観ることができる。自律と協調

は民主主義社会として不可欠な要素であり、それなくして適正なシステムの分散もあり得ない。

すなわち自律は、自己の在り様を社会的に客観視することのできる能力に繋がり、その上での協調を要するとすれば、それがまさに民主主義社会の根底に存在しなければならない要因であろう。それは、4.2節に示したように、日本の選挙において最近の投票率の低下傾向が、元々分散している国民が自律的に協調して投票に赴くことが民主主義的行動として必要であることを示すものであり、民主主義においては自律と協調が両輪となって稼働しなければならない。そして理想的には、そのような人々から成る社会こそが安定な民主主義社会となる要件を備えていると考えられる。

その観点から、先に本稿で示した日本の状況は民主主義社会システムとして不完全性を有していると言わねばならないし、また、現在のところそれを修正しようとする自助能力を持ち合わせているとも思われない。不完全な殻に閉じこもって覚醒することなく成り行きに身を任せて、漂うばかりである。

## 6, まとめ

日本文化の特性を探ってきた本稿の骨子を以下に記す。

- ① 日本の歴史の始めに親和的な縄文人が渡来し、狩猟採集の原始的文化を始めた。その後稲作技術を持った人やその他多くの人々が東アジアとその周辺から押し寄せた。遺伝学的に見た現代日本における縄文人の割合は、約1割に減少しつつ現代日本人社会のひな形を形成した。そこでは、日本の自然条件に適するように文化・文明が創られたが、その雑多な文化が入り交ざる状況下では、相互に意思が伝わり難く、以心伝心・忖度的な精神文化の元型を形成した。
- ② それによる社会の質は、論理を中心に意思の伝達を行う西欧文化と大きな差異を生じた。そしてそれは現在、日本において常に個人から社会的意思決定に至るまで忖度的曖昧さを含みやすい状況を作っており、民主主義に向かう世界的傾向と齟齬を生じている。それが日本の世界幸福度ランキングや世界腐敗認識指数ランキングなどにおいて、世界先進国中で低位にある要因と考えられる。
- ③ その文化的状況は、社会的健全性の観点から将来的に望ましい状況ではない。それを解消するには、時間が掛かるものの、自律的な基礎教育を重視し、そこでは一方的授業でなく、特にアクティブ・ラーニング形態の自律教育への移行が求められる。

## 結言

現代人にとり民主主義思想は、社会を活性化させる生活指針であると信じることができ



る。他方、以心伝心・忖度などの日本の文化的基底心理は程度の差はあれ、人間関係一般に付き纏っているとみられる。それは特に、古代に遡る遠因をもとに日本文化に根付いており、現代民主主義社会として、その健全性を阻害している要因となっており、かつ、健全な民主主義社会の構築を阻んでいる。したがって、困難を伴うが、早急に小学校教育にアクティブ・ラーニングを義務化するなど、日本に民主主義を根付かせる実効ある行動を探ることは急務である。

最後に感想であるが、筆者がヨーロッパにおける数度の滞在による観察では、喫茶店や公園など公の場で延々と議論している現地の人々を見かける機会が度々あった。それに対し議論好きであるとの印象を強くしたのであるが、現在は、そのような生活習慣が民主主義が成立させている要因であろうとの、考えるに至っている。

#### <参考文献>

- (1) C・ローレンツ「攻撃一悪の自然誌」1963
- (2) M・デーリー、M・ウェルソン「人が人を殺すとき」新思索社、1999
- (3) F・ドヴァール「共感の時代へ」紀伊国屋書店、2010
- (4) 山極「暴力はどこからきたか」NHKBOOKS、2007
- (5) 松本「日本人は何処からきたのか」NHKbooks 1992、
- (6) <https://ja.wikipedia.org/wiki/日本人>
- (7) 神沢「縄文人の核ゲノムから歴史を読み解く」生命誌ジャーナル 87号、2015
- (8) wikipedia「フリー百科辞典」2020
- (9) C・ローレンツ「文明化した人間の八つの大罪」新思索社 1995
- (10) 上草「戦略不在の日本」総合知学会論文、2019
- (11) 高野「集団主義と言う錯覚」新曜社、2008
- (12) 福田「競争やめたら学力世界一」朝日新聞社、2006
- (13) エコノミスト・インテリジェントユニット「民主主義指数」Wikipedia、2021
- (14) 伊藤「自律分散システム研究の課題と将来」計測と制御 1993. 10月号